患者—看護師関係と時間の概念

Patient-Nurse relationship and concept of time

津 田 右 子
Yuko TSUDA

要旨

看護は患者—看護師の信頼関係の成立を基盤として行われるケアである。この患者と看護師の関係は時間的経過が影響していると考えられる。そこで、本論では、アメリカの患者—看護師関係論を取り上げて、時間の概念（時間的経過と一時）がどのように論じられているのか比較検討、分析した。その結果、時間的経過がオーランド、ウィーデンバック、ペプロウ、トラベルビーの4人の理論家には明確でなかった。しかし日本の外口玉子と川野雅資の人間関係論には時間的経過の概念が含まれていた。但し、オーランドとウィーデンバックは「即時、その時その場で」という「一時」の時間の概念があった。

現代の日本の医療における看護援助では、入院日数の短縮化でゆったりとした「時間的経過」で患者—看護師関係を形成するには困難があるが、そのような状況では、「即時」にどのように患者—看護師関係を形成していくのか、「時間」に注目して患者—看護師関係を形成することが重要であると考えている。それには、ここで取り上げた人間関係論を見直すことが必要である。

キーワード

患者—看護師関係、Immediate、段階、時間的経過

I　はじめに

看護援助は患者と看護師の信頼関係の上に成立している。この信頼関係を考えてみると、患者と看護師の人間関係の成立において、時間の経過がどのように論じられているのかと知りたいというのが本研究の動機である。

筆者は患者ー看護師間の人間関係は出会いの時期からはじまり、少しずつ接近していくというプロセスがあり、そこには時間的経過を伴うと考える。「時間」とは広辞苑によれば、時の流れの2点間の長さ、時の長さである。また、「時間」の「時」については「特定の時期や一時、その場かぎり」と広辞苑にある。本論では、「時間」の概念を「時間的経過」と「特定の時期」いう視点で用いることにする。

本論の目的は、患者—看護師の人間関係にみられる時間の概念がどのようなものであるのか、看護学領域で用いられている人間関係論を用いて、患者—看護師関係を時間の概念の視点から、考察を試みることである。

比較検討に用いた人間関係論はアメリカのオーランド、ウィーデンバック、ペプロウ、トラベルビーの4人と日本の外口玉子と川野雅資の2人が述べているものである。

このアメリカの4人の理論は1950～1960年台に開発・発表されたもので、看護学領域においてよく知られているものである。日本の2人は現在精神看護学領域で活躍中である。

検討した結果、アメリカの４人の理論における時間の概念には、患者—看護師（学生）の関係成立に要する時間的経過という概念が含まれていなかったが、外口玉子と川野雅資の理論には時間的経過が明確になっていた。

Ⅱ　６人の患者—看護師の対人関係看護論と時間の概念について

１．ペプロウ　Hildegard E. Peplau　（1952）

ペプロウは「看護とは有意義な、治療的な対人的プロセスである。方向づけ、同一化、開拓利用、問題解決のプロセスであり、看護婦の役割は未知の人、無条件的な母親の代理人、カウンセラー、情報提供者、母親や兄弟の代理人、そして大人の役割をとりながら、患者自身の問題解決に寄与する（金子2000a）。」と述べている。

看護実践活動においては、看護婦は患者とともに、患者の直面している諸問題の解決に当る協働者なのである。ペプロウの民主的看護の前提となるものは患者の参加であるが、患者の参加は、看護婦と患者とが、お互いに相手に共通性をもちつつ、しかも固有の存在として尊敬しあうことが前提となる。

他者との建設的な相互依存関係のもとに、「建設的」「生産的」「創造的」「個人的」な生活にむけて人間各個人の成長と成熟とを助けるのが看護であり、それを社会力の機能と述べている。

ペプロウにおいては、看護婦のパーソナリテイが看護実践活動の手段として重要視される。看護には教育的道具の機能がある。ペプロウは観察対象を患者ではなく、患者が認識している状況（the situation as it is seen by the patient）にしている。

お互いに相手と共通性をもちつつ固有の存在として尊敬しあう関係、それを相互的依存関係だとしている。

人間関係プロセスでは看護する人と看護される人としている。

ペプロウの「患者-看護婦関係の変容を示す連続体」については対人関係の援助技術の目的は「患者が今の場面で彼自身に何が起こっているかを十分に理解し、記憶できるよう援助の手を差し伸べることである。そうすれば、その体験は人生における他の体験から分離されることなく、それらの体験の中へ統合されていくのである」とし、患者：個人的目標と看護師：専門職としての目標が問題解決にむけて看護婦の方が患者に接近しているとしている。ここでは、患者は看護婦に接近していない。看護婦のみが患者接近にしている。ペプロウは時間の概念について、明確にしていない。

２．オーランド　IdaJ,Orlando　（1961.）

看護の目的は患者のニードを満たすために、患者が求める助けを与えることである。看護実践活動は「看護過程nursing process」の中で展開させるが、それは、「患者の行動」、それに対する「看護師の反応」、および「看護行動」間の相互作用である。この３要素の看護状況は、看護師が患者の行動を知覚し、考え、感じ、行動する事が出来る距離内での看護師—患者関係であることを意味している。熟慮された行為である（action decided upon deliberatively）との対比は自動的行為（automatic activities）である。“Immediate（即時の、当面の）”という言葉によって表される看護婦-患者とのニードにおける「その時、その場で」という、即時、臨場性の概念はここに「時間」の概念（野島1992）が導入されていることが明確である。しかし、オーランドの「時間」の概念は、人間関係のなかで時間が過ぎていく、時間的経過プロセスという時間概念

によってではなく、看護師—患者状況という、その場、その時の即時的なまとまった全体のなかで生じる3要素として捉えられている。

3．ウィーデンバック　Ernestine Wiedenbach（1964）

臨床看護の目的は、その個人が（援助を要するニード）として体験しているニードを満たすことにある。臨床看護の援助と技術の本質は熟慮して混合された「思考」「感情」「行動」であり、援助を必要とするニードを持つ個人に適応されて、特定の目的を達成する。

ウィーデンバックの“Immediate”は2通りあり、nursing timeによって表される看護師側の即時、臨場、すなわち「今」「ここで」であり、他の1つは患者側の援助を必要とするニードの発生領域である（野島1992）。それは昼であろうと夜であろうと看護師が患者に接している現在である。ここでは「時間」のみならず「場」（in the immediate present）が含まれている。看護実践活動が展開されるのは患者が援助を必要としている「今」「ここで」である。看護理論に時間概念を導入したのはオーランドであったが、看護実践の本質規定に用語nursing timeを用いることによって、ウィーデンバックは時間概念を一層明確にした。

ウィーデンバックは臨床看護に必要な基本「技能」の種類を2大別している。操作的技能とコミュニケーション技能である。ウィーデンバックは看護師は看護実践の主体であると同時に、主体が客体（対象）に働きかけるための媒体である。このような考え方は、トラベルビーの治療的活用のなかに一層鮮やかに認められてくる。コミュニケーション技能は多くの手技からなっている。

ウィーデンバックは技能を構成する諸動作の特性は①動き、表現、目的に調和している、②正確、かつ巧みな「自己」selfの使用（adroit use of self,あるいはdeft use of nurse）である。しかしこの自己は精神的な自我や自己ということではなく、看護師自身という意味にとれる。例としてウィーデンバックは「看護師自身（『自己』selft）が患者の背中をなでる、脈拍を測定する、患者を支えたり、持ち上げたりする」と表現している。

4．トラベルビー　Joyce travelbee（1966）

看護を人間関係の過程（an interpersonal process）であると規定した。個人、家族、あるいは地域社会が疾病や苦しみの体験を予防したり、それらに適応したりするのを助け、必要ならば、こういった体験の中に意味を見出すように援助することである。トラベルビーはペプロウとオーランドの看護思想の類似点もある。トラベルビーは患者という用語を避けており、個人（individual）病気の人（ill person）を使う。ペプロウも患者については、personality（個人）という言葉を用いてパーソナリティの成長を提言している。患者という用語をつかわないことは、ペプロウを彷彿させる（野島1992）。ペプロウの人間関係の過程の概念による基本構造はもっともトラベルビーに類似している。

「過程」によって、看護師と看護師の援助を必要としている個人あるいは、集団との間でかわされる「経験、または出来事」もしくは、一連の出来事」は人間対人間の関係（human-to-human relationship）であるとしている。看護婦が『変化を生み出す人』である。人間対人間の関係（human-to-human relationshipを看護師である人間と病気である人間もしくは看護婦の実践活動を必要としている個人との間に生まれる経験、あるいは、一連の経験であると定義している（野島1992）。

また、カウンセリングの機能については患者は、看護師に対して、カウンセリング的かかわりにより自分を投影してくれるという信頼をもっていることと、看護婦は患者に対して自ら接近し、患者のよき理解者としての自覚がもてるという関係がある時に、看護独自のカウンセラーの役割がとれる。そこが、心理療法士、臨床心理士などの非指示的カウンセリングとは異なる点だと述べている（金子2000ｂ）。

トラベルビーは、看護は人間対人間の関係を通じて達成されると考えた。それは①最初の出会い、②アイデンティティの出現, ③共感感情（empathy）、④同情（sumpathy）, ⑤看護婦と患者のラポール（rapport）の形成にいたる段階である。.

また、トラベルビーは、出会いはそれぞれ一度限りのものであるが、①相互作用以前の段階、②導入ないしオリエンテーションの段階、③同一性出現の段階、④対人関係終結の段階、の４つの段階を提示しているが、時間的経過については明確に述べていない。

５．外口玉子の看護師―患者関係と時間の概念　（2006）

外口はウィーデンバックの「臨床看護の本質」を訳していて、患者―看護師関係について知見が深い研究者である。外口は人間関係論に独自のものを提示している。外口は、看護師－患者のかかわりは、そのつど一度限りのものであるが、時間の流れの中で積み重ねられ、いくつかの段階や時期を経ていく（川野　2006）、と考えている。

外口は、①関係をもち始める時期（初期の信頼がめばえる時期）、②関係を持ち続けていく時期（信頼がもてるようになり、関係の深まりと広がりを生み出していく時期）、③新たな人との関係に展開する時期（自立への歩みをはじめ、関係に一区切りをつける時期）、というように３つの時期を示している。時期というのは、時間的経過を示すものである。外口の人間関係論では、ウィーデンバックやオーランドの示す「今、ここで」という一度限りの時間を表現していたのとは対照的である。

ウィーデンバック、オーランド、トラベルビー、ペプロウの患者―看護師関係は段階を追っていく静的な理論であるともいえるが、実際に患者との人間関係の発展については、時間的経過が動的に進んでいくというほうが現実的である。

そのように考えると、外口が時間の流れを明確にしていることは、４人の理論家にはないものであり、現実の人間関係成立に沿ったものであるといえる。

６．川野雅資の患者―看護師の発展過程　（2006）

川野は患者―看護師の発展過程を３つの段階に分けて示し、この段階を時期としてとらえ時間的経過を軸にして患者―看護師関係を表現している。

第１段階：関係をもち始める時期、第２段階：関係を持ち続けていく時期、第３段階：関係の終結に向かう時期である。この３つの段階をみると、はっきりと時間的経過の中で、出会いがはじまり、関係の終結までを表現している。しかし、信頼関係という質的な深さについては、強調していない。患者は入院から退院までの時間的経過の中で、最初の出会いでは看護師の助力を必要としているが、退院の看護師との別れのときには、看護師の助力なしに生活できるようになると述べている。

Ⅲ　アメリカの4人の人間関係看護論の比較検討

1．時間とは、看護婦が看護行動を起こしている「今」「その時」の時間である。

オーランドは、「Immediate即時に」によって表される看護婦-患者とのニードにおける「その時、その場で」をいう、即時、臨場性の概念はここに「時間」の概念が導入されていることが明確である。ここでいう看護婦―患者関係の距離内とは、その時、その場で、という距離であり、そのときの時間の概念であった。ここには、看護婦―患者関係の時間的経過やプロセスは明確にされていない。

看護のプロセスという言葉はトラベルビーが用いたが、時間的経過を看護のプロセスの中では明確に述べていない。

ウィーデンバックの“Immediateは２通りあり、nursing time, によって表される看護婦側の即時、臨場、すなわた「今」「ここで」であり。他の１つは患者側の援助を必要とするニード゛の発生領域である。それは昼であろうと夜であろうと看護婦が患者に接している現在である。ここでいうnursing timeは、「今」「ここで」という意味であり、プロセスとしての経時的時間ではない。オーランドの「時間」の概念に類似している。

ペプロウとトラベルビーは時間の概念については明確にしてなかった。

2．患者―看護師関係について

ペプロウのいう相互作用であるという視点は、現在の看護師―患者関係に通じる基本的概念である。この相互作用という用語は、信頼関係や人間関係にまでは発展してない。

トラベルビーは患者―看護師関係を人間対人間の対人関係として信頼関係（ラポール）まで発展させている。

相互作用は看護師と患者が互いに働きかけることという意味では、患者の主体性を重んじた看護論であるといえる。

オーランドは、「患者の行動」、それに対する「看護師の反応」および「看護行動」間の相互作用である。この３要素の看護状況は、看護師が患者の行動を知覚し、考え、感じ、行動する事が出来る距離内での看護師―患者関係であることを意味している

両者は主体（看護師）と客体（患者）であったり、看護する人と看護される人であったり、看護師は患者のニードを充足することを助けたり援助する人、患者は看護師の援助を求める人であったりする。患者と看護師の未知の人同士の最初の出会いでは、看護師は自ら患者に接近して個人（患者）に変化を生み出す人であったりする。

ウィーデンバックの臨床看護の目的は、その個人が（援助を要するニード）として体験しているニードを満たすことにある。臨床看護の援助と技術の本質は熟慮して混合された「思考」「感情」「行動」であり、「援助を必要とするニードを持つ個人に適応されて、特定の目的を達成する。

患者―看護師関係は、相互関係にあり、信頼関係（ラポール）発展する。そしてこのような、相互関係や援助関係は看護師から患者への一方向的であるといわれている。

ペプロウは患者と看護師のそれぞれにパーソナリテイがあり、相互に成長していくと述べているが、この時の患者と看護師の相互関係の「接近」については明らかにしていない。

Ⅳ　結果・考察

患者―看護師関係についてⅠとⅡで検討した６人の研究者の「患者―看護師関係と時間の概念」

の結果を表1にまとめた。

表1　患者—看護師関係と時間の概念

研究者名	時間の概念 (ある=○、なし=×)	時間の概念の特徴	備　考
ペプロウ	×	なし	対人的プロセスを示している
オーランド	○	即時、その時その場で(Immediate)	時間の概念を看護理論に導入
ウィーデンバック	○	2つのImmediate、看護師側の即時(nursing time)と患者のニード発生時	時間の概念を一層明確にした。
トラベルビー	×	なし	患者—看護師のラポール(rapport)形成にいたる4つの段階を示している。ペプロウに類似した理論である。
外口玉子	○	そのつど一度限りのものであるが、時間の流れの中で積み重ねられ、いくつかの段階や時期を経ていく	段階を時期と表現している。 段階に時間的概念を加えている。
川野雅資	○	患者—看護師関係を3つの段階に分けて示し、この段階を時期としてとらえ時間的経過を軸にしている	出会いから別れまでの時間の経過を時期を主軸に示している。

(津田右子作成　2006)

患者—看護師関係の成立過程について、時間の概念の視点からアメリカのオーランド、ウィーデンバック、トラベルビー、ペプロウの看護理論及び日本の外口、川野の人間関係論の比較検討を行った。

その結果、1950～1960年代のアメリカの看護理論では、時間的経過を明らかにしているものはなかった。しかし、看護援助時の「今、その時Immediate」というように時間を捉えている看護理論(オーランド、ウィーデンバック)があることがわかった。これは本論で定義した「時間」の概念によれば、「時」という「一時、その場限り」の概念に当たると考えられる。これらの看護理論では、患者—看護師関係成立には各段階があると示しており、そこでは、信頼関係という質的な深まりについて言及している。患者との出会いの「その時その時」を大切にしていくことを強調していると考える。

ペプロウは、段階ではなく、治療的プロセス(過程)という表現をしている。

プロセスであれば、時間的経過の概念が含まれているのではないかと考えられるが、ペプロウ

の示すプロセスというのは、看護理論モデルとして、抽象的なプロセスであるので、時間的プロセスについては明確にはしなかったと考える。

トラベルビーはプロセスではなく、段階という言葉をつかって、人間対人間の看護理論を展開した。これらの４つの段階はそれぞれが重なり合っている。しかし、１段階に「最初の出会い」という表現をしているので、その中には、「時間」の概念を時間的経過として意味づけていくことが可能であると筆者は判断する。

これらの理論は、今から約50年前のアメリカ医療社会において発表された理論である。看護師は機能的業務を行っていたと考えられる。そうすると、一人の看護師が複数の患者を担当し、入院から退院まで、継続して担当した看護援助はしていなかったということになる。そのようなことを考えあわせれば、患者―看護師関係はその時々の出会いの時を大切にして、信頼関係の成立を目指したのであろう。

そして、現在の日本において、患者―看護師関係を論じている外口と川野の考える人間関係を検討してみると、そこには、時間的経過を枠組みに取り入れた人間関係論が展開されていることがわかった。現在の日本の看護業務は、看護師が受け持ち患者を入院から退院まで責任をもって援助していく体制をとっていることが多い。そうすると、川野のいうように、関係をもち始めて、退院によって関係が終結するという時間的経過の中で、患者―看護師関係が論じられる。しかし、外口では患者とどのように信頼関係を形成していくのかという視点が明確になっているが、川野の人間関係論では、信頼関係については、特に強調されていない。患者の人権や倫理について、看護師の責任が大きくなっている現在の状況をうけとめるには、患者との信頼関係の形成は重要である。

健康の維持や回復を目的として、看護援助を必要とする患者にとって、看護師との出会いがあり、終結もある。高度な医療が進む中で、看護師の業務も50年前とは異なっていることが考えられる。入院期間も短くなっている。短い入院期間で、いかに信頼関係を築いていくのかは、看護師の課題である。在院日数の短縮傾向が強まり、急性期病棟から回復病棟への転棟など、患者が担当看護師に継続してケアされる時間的経過は少なくなっている日本の現状では、ゆっくりとした時間的経過を伴った人間関係成立は望めない場合もある。そのような状況では、看護師が患者と関わりをもつ「一時」が大きな影響をもつ。患者と信頼関係に近づけていく看護師の援助が、その場限りの出会いという「時」にあることを、改めて看護師は重要視する必要がある。

そのことからすれば、オーランド、ウィーデンバック、トラベルビー、ペプロウの人間関係理論はいつの時代にも、そして今後も重要なものである。

以上のことから、「時間的経過」および「一時」という時間の概念は、患者―看護師関係成立においては、大きな意味を持っていることが本論で確認できた。

Ⅴ　本研究の限界

本研究は訳文による文献をもとにしているため、そこに限界がある。今後、筆者自身が原著の英文を直接検討することが必要である。

Ⅵ　おわりに

今回、人間関係論と時間の概念の関係について検討し、患者―看護師関係について、各段階という表現と各時期という２通りの表現があることを知った。患者との出会いを「一度限りのその

時」というように理解することや、入院から退院までの時間的経過にそって「時期」というように理解することもできる。

患者から信頼を得るような人間関係を成立していくことは看護の重要な部分であり援助の基盤である。今後も患者—看護師関係成立について研究していきたい。

引用・参考文献

Ernestine Wiedenbach (1964), Clinical Nursing：A Helping Art, Springer Publishing Company,Inc., New York.,

ウィーデンバック (1969) 外口玉子・池田明子訳:臨床看護の本質—患者援助の技術, 現代社,

Hildegard E. Peplau (1952), Interpersonal Relations in Nursing, G. P. Putnam's Sons, New York,

ペプロウ (1973) 稲田八重子・小林冨美枝・武山満智子・都留伸子・外間邦江訳:人間関係の看護論, 医学書院

Ida J,Orlando, (1961) The Dynamic Nurse-Patient Relationship, G. P. Putnam`s Sons , New York.

オーランド (1964)、稲田八重子訳:看護の探求—ダイナミックな人間関係をもとにした方法, メヂカルフレンド社

Joyce Travelbee, (1966). Interpersonal Aspects of Nursing (看護の対人的側面), F. A. Davis. 長谷川浩、藤枝知子訳：人間対人間の看護,医学書院, 1974

Ann Marriner-Tomey (1994) Nursing Theorists and Their Work 3rd edition Mosby-Year Book Inc.,St.Louis.

都留伸子監訳 (2000) 看護理論家とその業績 第2版 医学書院,

金子道子 (2000a) ヘンダーソン、ロイ、オレム、ペプロウの看護論と看護過程の展開 照林社 p269

金子道子 (2000b) 前掲書 p278

川野雅資 (2006) 精神看護学Ⅱ 第4版 nouvelle HIROKWA p29

広辞苑 岩波書店 第五版

野島良子 (1992) 看護論 へるす出版